

△昭和四十一年十二月淡交新社刊A5
版、二四三頁、七五〇円V(佐々木)

仏教興起時代の思想研究

雲井昭善著

原始仏教の教理、教義についての研究は古くからなされ、その業績も多いが、それを生み出した背景についての研究にまで進んだのは、わが国としては、最近の傾向である。この労作も、そのような学界の新しい傾向を敏感に感じとって成された、一つの業績ということができよう。

著者はしかし「社会経済史的史観に立って仏教興起時代を扱おうとする」のではないという。「精神史の歩みを度外視することは許されない」といい、また「一つの宗教が社会に受け容れられるためには、そこに躍動する宗教家の歩みを見逃してはならない。時代を動かす力はやはり人間である」という。そういう配慮をも加えながら、原始仏教の背景を明

し、それによって原始仏教をより具体的に把握しようとする意図する著者は、まず「宗教としての仏教」が当時勃興しつつあった新思想の中で「いかなる位置をもっていたか」を問ひ(第二、三章)、次に、その仏教がいかなる「社会的基盤」の上に打ち立てられていったかを問ひ(第四章)、さらに、バラモン教と仏教との立場や観点の相違を究明し(第五章)、最後に、仏教を「人間の宗教」として、その倫理観を明らかにし(第六章)ようにする。

卓見によれば、この書において著者のなした第一の貢献は、ページ数も最も多く著者が最も力をそそいだと見られる第三章において、ローカヤタおよびアージヴィカカ思想やその「生感」を明らかにした点に認められる。ローカヤタについては、まず、後代のインドにおいて一般にそう解されている唯物論者としての、すなわち六師外道の中でいえばアジタ的な、ローカヤタと、阿含および大乘經典に現われる詭弁論者としての、すなわち六師外道の中でいえばサンジャヤ的な、ローカヤタとの二つの別が論

ぜられ、そしてその二つの相互関係が究明されている。またアージヴィカカについて、著者は、マツカリ・ゴースララを先達者とした裸行の不作法な苦行者の群れとしてその「生感」を明かし、それが仏教教団とはげしい軋轢を生じ仏教側からもっともはげしく非難されていたことを述べている。

第五章第三節において「来世」の問題を考察して、バラモンの宗教における来世意識の発達の上に(1)現世の延長として存在すべきはずの来世の素朴な意識(2)輪廻思想の発生を契機とする現世に続く来世の容認(3)現世の否定の上に立つ永遠・不長の世界の要請、という三段階を區別し、それに対して非バラモンの自由思想のつた態度を説明している点もわたしにとっては興味深い。ただここでは、仏教の態度がもう少しくわしく論ぜられていたら、と望蜀の感をもつけれども。

△昭和42年3月平楽寺書店刊、A5版
6+428+43p. 三、五〇〇円V(桜部建)